

聖書研究グループの在り方

黒崎幸吉

教会に属しない人、また属することを欲しない人、または教会のない地方の人などは聖書を研究することによつてその信仰を養いこれを保つことができるのであり、またたとい教会に属している人たちにとつても、これまでの教会の説教だけでは聖書に關して学びうるところが非常に少ないのであるから、やはり聖書研究のグループを造ることは必要であり、かつ有益であることは疑うことができない。

それらのグループの中で、適当な指導者を持つてゐるものは非常に幸福であるが、往々にして適当な指導者がない場合にはどうしたらよいだろうかといふことが問題となり、また時々問い合せに接する故、ここにまとめて私の考えを録して見たいと思ふ。

それらのグループの中には会社、工場、学校、官庁等で、その内部の有志が集合する場合もあるべく、またはある家庭を中心に遠近の友人が集つたり、または数個の家庭で順番に集會する等の場合もあるようである。どれでも少しも差し支えがなく、

またこれらの各々にそれぞれ長所も短所もあるのであるが、それらのことはあまり気にする必要はないと思ふ。

第一に氣をつけなければならないことは、それらの集會は真面目な、しかも正直な氣分に充ちていなければならぬことである。不真面目な分子の介在は全体の空氣を亂し、集會を妨害し、時にはこれを破壊してしまふ。しかし真面目であるということ、ややともすればいたずらに固苦しくなつたりまたは偽善者になる虞れがあるのであるから、この点は充分に注意して、各人の真面目な疑問や質問や反対は充分にこれを尊重しなければならぬ。かくして真面目な討論が戦わされるところに、かえつて真の聖書の研究が起こるであらう。

第二に集會を進めて行く方法であるが、これは必ずしもある一定の型による必要はない。大体次のような種々異なつた行き方を考えることができる。

(A) 中心的指導者がある場合は、その指導者が主として聖書を中心にその研究や思索や体験の結果を発表する。これによつて集會の他の人々(多くは初歩の求道者であるとして)が聖書について次第に学ぶことができ、信仰の何たるかを知り、イニス・キ

リストを信ずることができるようになるであろう。

ただこの場合集会の全体があまりにその指導者に依存することはもつてのほかである。また指導者もいつまでもその地位を保持すべきもののごとくに考えてはならない。各人が皆独立独歩ができ、また進んで他の人々を指導しようになることがその目的でなければならぬ。それには指導者まかせにしてその人の講義をきくだけの安易の途をとることは禁物である。自らは努力せずにただ他人の話のみを聴くことは、水に入らずに水泳の講義のみを聴いているようなものである。

(B) 特定の中心的指導者がいない場合は、あるいは信仰上の問題を造つてこれを中心一同が研究思索の結果を持ち寄ることも一つの方法であり、あるいは聖書の一部を研究の課題としてその研究を受け持てることもでき、または各人各別の部分の研究を受け持ち分担して、各人は自己の順番に自分の割り当てられた部分を責任をもつて発表する等の方法をとることもできるであろう。そして他の会員も自分の受け持たない部分も研究して行き、発表者の研究を補

うようにすることは、いつそうその研究会を有意義なものにすることができる。

(C) 自分の研究を発表するまでに至らない会員がどのような場合、例えば中学程度の生徒たちの集会などでは、聖書や、キリスト教に関する書籍や雑誌の中から自分に益を与えた部分を一同の前に朗読し、自分が感激した理由を述べる等の方法もありうることと思う。殊に今日のように書籍や雑誌の入手の困難な時代には、種々の書籍を一人が所持することはでき難いので、会員の各自が所持する書籍によつて右様に朗読することも有益であろう。ただこの場合なるべく聖書中心であるようにありたいものである。

第三に聖書を研究する方法であるが、拙著「聖書の読み方」にも書いておいた通り、聖書はなるべく聖書そのものをもつて解釈することが一番大切である。それは聖書はその各部が一つの有機的全体を形成していると言いうるからである。そしてそのためには聖書全体を充分に繰り返し繰り返し熟読することが必要である。しかし全部を暗記することはなかなか容易ではないが、幸いにして「引照付聖書」というのがあり（これは目下品切である。米国より寄

贈の聖書には引照がついていないことは、研究者にとつては甚だ遺憾なことである。拙著「註解新約聖書」の各巻には、引照をつけている）、この引照をたどつて、関連ある個所を探して行くことは聖書を研究する上に是非とも必要な方法である。

その次には註解書が必要である。註解を読むことは甚だ乾燥無味なものであるが、註解を通して聖書の辞句の精神に触れることができるならば、それは聖書の理解を助けることが非常に多い。この種の集會を持つているところでは私の略註や註解を用いているところも相当に多く、この点で役立ちうることは非常によろこばしい。従つて註解類はできるだけ原文に忠実なものであることが必要である。聖書の原意を離れた自由な思想にも極めて有益なものもあることは事実であるが、また時にはそれが誤つた思想に導く場合がないとも限らない。

その他の参考書（伝記・神学書・宗教論文・信仰の実験談その他）も聖書の研究に裨益することはもちろんであるが、すべての場合において聖書を中心に置くことを忘れてはいけない。聖書を中心に置かずして聖書以外の何かを中心に置くようなことがあれば、聖書の真理は往々歪曲されるようになる。

第四に聖書を解釈する態度であるが、人の陥り易い欠点は、多くの場合聖書の真理をそのまま受け納れようとせず、自分の意見を聖書に裏書きさせようとすることである。そして自分の意見と多少異なっている聖句をばこれを無視したり、曲解したりしようとし、また自分の説に好都合な聖句をばできるだけ強調し、殊に前後の關係をば無視して自己の主張の擁護者とするというような態度は是非とも避けなければならぬ。何となればこれでは聖書そのものが曲解される場合が多いからである。

また聖書の研究は決して頭腦の問題ではなくハートと実践の問題である。聖書の真理はこれを実行しまたは実行せんとすることによつて明らかにせられ、また心より神を愛し人を愛することによつて真理が悟られる。聖書を単に哲学書でも読むような心持ちで読んでも聖書の真理は容易に悟られない。

また聖書の意味は祈りの中に示されることが非常に多い。これは当然なことであつて、聖書そのものが神との靈の交りにおいて書かれたものである以上、祈りによつて神と靈的交際に入ることなしには聖書を理解することはできない。祈りによらない聖書研究は乾燥無味であり、無力である。

また聖書の研究は世との戦いの中にこれをなすべきである。世との戦いはすべてのキリスト者の避け得ない事実であり、この戦いの中にキリスト者の味方となりこれを援けるのは神である。そして神は御言の剣をもつてキリスト者の手に与えてこれをして世と戦わしめるのである。聖書の言がその真の意義を發揮するのはこの戦いにおいてである。それまでは聖書は鞘に収められた宝剣であつてその中味を表わさずその味を示さない。

大体以上のような注意をもつてするならば、いかなる寒村でもいかなる無学者でも聖書研究の小集会を持つことが可能となるのみならず、これによつて多くのものが与えられるであろう。今日各地においてこの種の集會が催されているけれども、私の希望は日本全国、津々浦々まで皆悉くかかる集會があるようになつてほしいということである。本誌の読者は二人三人でも進んでかかる集會を始めて見られることを希望する。

（『永生』二〇二号、一九四八年五月）